方向
第一〇三号　一九八九年九月一〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

十四行詩縁起

1962.2.21.-1989.8.21.　原田憲雄

王はドラムをこのむ
女の門前で打つこと千一夜
窓に影さえ映らなかった
園庭で王はひとりドラムを打つ

女は金貨をこのむ
町でみそめた青年にこいぶみ三通
返事はなかった
女は数える　王の肖像を刻んだ金貨

青年は詩をこのむ
英雄讃歌をたずさえて訪問したが
王の門番はおっぱらった

追いかえされた青年は
女の手紙の裏に書きつける
愛のむなしさの十四行を

夜ふけてきみを

1956.9.21.-1989.8.23.　原田憲雄訳

墓のべの木立はさけぶ秋風に
墓ぬちにひそめばむなしむらぎもの
ただ詩魂のみ消えうせず
夜ふけてきみを訪ひもこそすれ

ひそけきひとの

入り日かたぶき
西風　冷えぬ
ひそけきひとのこよひ来ますや
われ佇ちつくす　あをぎりのかげ

降伏の旗

君王の城にのぼりたる　降伏の旗
宮ぬち深くすむ身には故わかねども

十二世紀中国は山東の東平に、竹林に住んで竹渓翁と号する人がいた。ある晩、幽霊がやってきて、竹に詩を書きつけて去った。「墓前古木号鵰鳳　墓尾幽人万慮空　惟有詩魂銷不得　夜深来訪竹渓翁」周紫芝『竹陂詩話』

1956.9.29.-1989.8.23.

峨眉道者という僧がいた。あるときふらりと偉丈夫がやってきて話をかわし、来年の今日また来る、といって去った。約束の日、僧は沐浴し、端坐したまま死んだ。男が来てそれを聞くと、嘆いたすえ、姿を消した。僧の部屋の壁には、詩が書き残されていた。「落日斜　西風冷　幽人今夜来不来　教人立尽梧桐影」　『竹陂詩話』

1956.9.29.-1989.8.23.

費氏は才色兼備で、後蜀の後主孟昶の愛をうけ花蘂夫人とよばれた。九六五年後蜀が亡び、夫人は、勝利者宋の太祖の後宮に入った。滅亡時の事情を問われ、この詩で

十四万のいくさびと甲冑すてて
ひとりだにあらざりしかな猛きをのこの

片え雨

秋の浦わの砂さむく鷺は水浴び
敬亭山はくれかけて雲ながれ
どこからか吹きよせられた　片え雨
つむじ風　となりの舟だけ湿らせている

ふなどまり

さとごころ釣りあげたのは舟歌だ
せんべい布団にはさまれて淋しきふくれ
窓々に紅いともしび　烏みたいな苫てらす月
こよい　酒きめ　どうにもならぬ

答えたという。「君王城上竪降旗　妾在深宮那得知　十四万人斉解甲　更無一個是男子」　陳師道『後山詩話』

1984.9.18.-1989.8.24

朱彝尊（一六二九-一七〇九）あざなは錫鬯、竹垞と号し、浙江秀水の人。考証に長じ、古文に巧みで、詩人としては王士禎にならび、詞人としては陳維崧と並称された。『曝書亭集』など、著作に富む。この詩は「秋浦」と題する六言絶句で「秋浦沙寒鷺浴　敬亭山暝雲流　何処吹来片雨　回風正濕鄰舟」『曝書亭集』巻四に収める。

1985.6.30.-1989.8.24

楊韻（一八二一-一八六〇）あざなは仲玉、号は小鉄。浙江嘉興の人。『息笠庵詩集』六巻など。これはその巻一からで、題は「夜泊塘西」。「釣起鄰心是櫂歌　衾寒如鉄擁愁多　紅窗鐙火烏篷月　酒醒今宵奈爾何」

秋水閣

秋水閣のまえにながながと秋の水
おしどり湖畔にうっとり眠るおしのとり
いさり舟　棹さして　ひらひらゆけば
ゆれうごく菱の花　匂い　いっぱい

春のおもい

おでかけのとき花はさいていなかった
花が散るのに　あなたは帰られぬ
階段にいっぱいの花も掃かずに
じっと見る　蝶がふたつもつれ飛ぶのを
よさりの小雨が　軒のあたりにしとしとそそぎ
愁いのしずくが砕けおちる鴛鴦のるり瓦
鴛鴦が飛びこんできたわ　夢のなかに
おどろいて鴛がきけんだら　夢はさめました

同じ巻から。原題同じ。「秋水閣前秋水長　鴛央湖畔睡鴛央　漁舟蕩槳紛紛去　揺動菱花十里香」
この人の詩文集を刊行した嗣子で画家の楊伯潤は、亡妻袁華（一八三二－一八六五）のためにも『縵華楼詩鈔』を編んだ。

1985.6.29.-1989.8.24.

王樹枏（一八五一－一九三六）あざなは晉卿、号は陶廬主人。河北新城の人。清朝では、四川・甘粛の知県、新疆布政使。民国では衆議院議員、清史館総纂などの重職についた。東西両洋の学問に通じその全著作が『陶廬叢刻』にまとめられている。この詩、原題は「春思」で『陶廬詩続集』巻九に収める。「郎去花未開　花残郎未帰　満階花不掃　愁見蝶双飛　夜来細雨当簷瀝　春愁滴碎鴛鴦瓦　鴛鴦飛入夢中来　驚恼黄鶯喚夢回」　少年時代、李賀にそっくりの詩をつくり、中年以後、黄山谷に傾倒したという。

長沼静人句集『笈舎抄』

1989.8.25.　原田憲雄

拝啓　きびしい残暑です。ご一家お元気の趣き、およろこびいたします。古稀記念の句集をお送りくださいましてありがとうございます。前句集『白頭』をいただいてから早くも十年、ということがまず感慨を誘います。数日前、本棚を整理していたら一九六九年の日記がでてきて、そこに一月十二日付けのあなたの最初のお手紙と四月十八日付けのわたしの礼状の控えがはさんでありました。詩集『もうひとつの神話』を頂いたときのことでした。ご縁の結び主たる富士正晴さんは、すでに回顧展の主人と変化し、こんな手紙を書いているわたしを「あほか」と笑っているような気がします。

ヒジキだけ食いちらすかな旅のあと

まずこの句に目が止まりました。昔の旅とちがって、いまは旅館でもホテルでも食堂でも、見た目は豪華で千篇一律のごちそう。うんざりして帰り、かつての木賃宿でよく出たヒジキばかりを選んで食いちらす、といったところでしょうか。とんだ誤解をしていそうでもありますが、わたしにはそんなふうに受け取れました。意味はとにかく「ヒジキ」と「食いちらす」と「旅のあと」という貧しくわびしいことばのざらざらした組合せが、気に入りました。

端座してやがて日永をあわてけり

ユーモアが端座しているような作品です。思わず吹きだしました。読み終わってしばらくすると、しゅんとします。お会いしたことはないのに度々いただいたご本から描いていたあなたの姿が、さらに奥ゆきをひろめます。

箸をもて飯くうひとの姿憂し

箸で飯くうあたりまえの姿がなぜ「憂し」なのかいっこうにわからぬ変な句ですが、それがおもしろい。「悪食をきわめて」という詞書きがあるいは説明なのかもしれません。それで納得いくわけでもなく、説明なしで分からぬままの方が、わたしには落ち着きます。

若葉一樹しくしくしくと鳴くならん

東風ありて野の道青く見えてくる

少女の初恋物語を老人が見ているおもむきです。

みみずの死名なくつましく棒となり

「棒」がすこぶるよくきき、

念ヲオシ念ヲオシ梅ノ坂マガル

湧き出たる大風呂敷のばばうらら

は、老いそのものが神仙となって出現したみたいです。

作者が七十の人だから老いをうたって巧みなのは当然だろう、といった声も聞こえそうですが、七十になることと老いを描きだすこととはまったく別事で、やはり七十のわたしが、おのれをオジンと戯れてはみても、

じじがばばに雑巾なげし春のくれ

のような「じじ」ないし「ばば」を、わたしは言葉のパレットで練ってこなかったことに気づきます。

壁に蔦おのれに恥じて裸婦がいる

泰山木咲いても荘子訪ねこず

詩も、短歌も、俳句も、川柳も、文章も、書も……　なんでもこなして広い視野に遊ぶ人の両面を示す句の例といえましょうか。

いやな自分ばかり花やぐ古稀の春

「いや」な面にも、ちゃんと目を向けておられるのだから、いえば蛇足になりますが、川柳集に入れたほうがふさわしいのでは、といった句がいくつか目につきました。あるいは、そんなことを言いたがる者のために、わざとそっと混ぜておかれたのでもありましょうか。

いよいよご清健で、またよい作品をお示しください。

1989.8.　柴野純孝

越山考

一、越山会

たまたま、ある雑誌の記事目録を見ていると「越山田中角衛」というのがひときわ大きく出ていた。どうやら越山は、あの田中角衛氏の号であるらしい。同時に「越山会」すなわち氏の後援会の名前も、すぐ念頭にうかんでくる。

田中氏は例のロッキード事件で失脚し、まもなく不運にも病気で倒れ、爾来段々有為転変のマスコミの世界から忘れ去られて来たのであるが、かつての飛ぶ鳥をも落とす全盛時代には、その背後にある越山会の動向も極めてニュースバリューの高いものだった。氏はロッキード事件に係わりながら、その次ぎの衆議院選挙で、相変わらず全国最高点で当選し、世人をして唖然たらしめた。それはまた同時に越山会の陰然たる力を見せつけることにもなった。このように越山氏と越山会とは一心同体であり、また、雪国越後人の律義さをも伺えるというものである。従って越山氏も、彼らの熱意に応えて上越新幹線等を実現して見せた訳であろう。かく両者の相依の関係は並のものとは桁が違うのであって、そのことをうまく象徴しているのが「越山」なる言葉そのものであろう。

二、越山とは

ところで越山とは何ものであろうか。一見しただけでは、それは文字通り「越の山」すなわち「越の国の山」に外ならない。してみれば何も越後の山に限る必要もない。越後も、越中も、加賀も、越前もみな、古代の越の国に入るからである。さらに一考を要することは、越後は大国で山も多いのであるが、白山や館山のような名山がないことである。しかも何が故の越山か。恐らくそれは上杉謙信作といわれる、あの有名な「霜は軍営に満ちて…」で始まる漢詩に由来するところであろう。天下を睥睨せし一代の英雄、遠征なかばにして病魔に倒れ、覇権への雄図空しく、遂に夢は挫折したのであった。その謙信の詩の第三句が「越山あわせえたり能州の景」である。不落を誇った七尾城を三度目の攻撃で陥落させ、月下に太刀を横たえ、おもむろに杯を傾ける英雄の姿が彷

彿としてくるようである。〈※謙信の詩　霜満軍営秋気清　数行過雁月三更　越山並得能州景　任他家郷念遠征〉

三、越山は越山にあらず

ところで、この詩に出てくる越山は、先に述べた角衛氏やその後援会の越山とは、どうもピントが合わない。なぜか。そもそもこの詩がうたう場所については、古来、当地方では能・越国境に位置する石動山であるといわれている。石動山は畠山氏の拠る七尾城から尾根伝いに数キロ南にあり、高さは海抜五〇〇メートル位で、頂上には有名な石動山天平寺があった。そのことは村上元三氏の「流雲の賦」にくわしい。中世から近世へかけて多数の僧兵を擁した一山の勢力は、加・越・能の戦乱の歴史に必ずといってよいほどからんでいる。石動山を征服し、七尾城を陥れて、多年の宿願を果たした英雄が、月下に海を越えて、東方はるかに、いぶし銀のように輝く堂々の山脈を詠じたのが、この三句目であり、その山脈というのは立山連峰に外ならない。そして高い山脈の、はるか彼方に、彼の遠征を想うている家郷、すなわち春日山があるのであった。

故にここでいわれる越山とは、漠然といまの世間の人の言う意味での、越中の山とか越後の山とかではありえないわけである。文字通り、越の国を象徴する山、それが越山であり、すなわち立山連峰であった。新雪に淡く輝く越山の雄姿は、さぞ英雄の心をとらえたことであろう。首相の座を伺った頃の角衛氏が、郷土越後の人々の崇敬してやまない偉大な先達にあやかりたく越山なる語を借用した次第であろう。氏が首相になったとき、越後の人々は、あの英雄の夢を四百五十年ぶりに成し遂げてくれたといって、熱狂して喜んだということである。む

べなるかなである。ただ英雄の越山とくらべて今の越山ははなはだ矮小と言わなければならない。

四、懐郷の詩について

だいぶ古い話しになるが、ある書店の広告用の小雑誌で、それぞれの方面での権威、大家といわれる人たちが対談し、謙信の懐郷の詩をとりあげられた。そして結論として、謙信の自作ではなく、恐らく頼山陽の手になるものであろうとのことであった。この詩が遍く天下に知られるようになるのは確かに『日本外史』によるところが大きいと思われるが、そのことと作者云々とは全く別の事である。いま二つの点から、その謬りであることを考えてみたい。

その一。微学浅才で他の事は分からないが、『日本外史』以前の書物でこの懐郷の詩に触れているものに『常山紀談』がある。著者は、岡山藩池田の儒者であった湯浅元禎(一七〇八-八一)で、常山はその号である。同書は、元文四年(一七三九)の自序があるが、常山はほとんど一生この書を増補しつづけたらしい。しかし、頼山陽(一七八〇-一八三二)の生れたのは常山の死の前年なのだから、『常山紀談』にのせる懐郷の詩が後世の竄入だとでも証明されないかぎり、山陽の作とする説は成り立つまい。

その二。石動山の頂上に立つと、遠く半島の先々まで美しい能州の景が一望でき、また東方に眼を転ずれば、海(富山湾)の彼方に越山(立山)の天に向かってそそりたつのが視界に入ってくる。峨々たる越山の、はるか彼方にこの遠征を憶う家郷があり、その家郷をまた越山を眺めながら憶わざるをえないのであった。このような

臨場感は実際に体験した人でないと表現不可能であろう。

いったい、頼山陽は越中や加賀へ来たこともなく、石動山などは知るべくもないはずである。山陽作で有名な川中島決戦の詩、すなわち「鞭声粛々夜川を渡る…」が『山陽詩鈔』にのっているので、懐郷の詩も山陽作と考えられたのではないか。

むかし中学生時代、漢文の虎の巻を見ると、越山をただ単に越中の山々と述べてあったが、石動山自体が国境にあり、その東側半分が越中であるがゆえに、「越山あわせえたり」は詩にならないはずである。県境で小便を流すようなことになるのではないか。

作詩の場所を七尾城という本もあるが、この城からは内海（富山湾）は見えず、立山も見えない。

五、後書き

かつて、京都市右京区花園の法金剛院で、古長持ちをひっくり返していると、天平寺の泰澄大師千回忌の招待状が出てきた。見事なものであった。その天平寺も、いまは、往時をしのぶよすがはほとんどない。

※前号正誤　一頁末行　下段　軟らかい→軟らかな　一五頁一行　歓喜せよ。→歓喜せよ。（145）

一九八九年八月三一日　原田憲雄

クルミを愛する婦人がいた
クルミを愛する虫がいた
虫がクルミの葉をたべる
葉は脈だけをのこして透け
トビ色のレースを空にかける
見ようによっては美しい
けれども婦人は気にいらない
どうすればよいかとわたしに問う
「ほおっておくか　葉をまくか」
「ほっておいたら枯れるでしょう」
葉をまくか
わたしが見ていて婦人に葉を
撒かせるわけにもいかんだろう
しかたがない　噴霧器肩に
屋根に上ってまきはじめる
クルミは屋根よりうんと高く

木のむこうから風が吹く
葉は木によりわたしに降り
虫よりわたしが滅亡しそうだ
それでもどうにかまきおわり
屋根を下りようと思ったら
トユの腐っているのが目についた
おとといの雨が降ったとき
溢れて滝となったのが
滝を見て　婦人がしきりになげいたのが
わたしの記憶によみがえる
しかたがない
ガラクタいれからブリキをさがし
腐ったトユの修理をする
クルミの木の下の小さな家
そこにはクルミを愛する婦人
そしてわたしも住んでいる

クルミの木からは緑の葉
トビ色のレース　さまざまの虫
こおん！　とひびいてクルミの実
それらがしきりに落下する
屋根はそれらにうずもれて
トユが腐るのも無理はない
婦人がなげくのも無理はない
無理のないことが多すぎて

わたしは時に屋根に上り
わたしは時に屋根より下り
天を仰いで浩嘆(こうたん)する
などといったらおおげさだが
クルミの木の下の小さな家
婦人と同居のじいさんの
夏のおわりの一日なのさ

墓参り

1989.8.10.　原田　慶

山の上の墓地は、以前のちょうど倍の広さになっていた。ずっと昔から同じ広さで足りてきたのは、土葬だったからである。墓石が少なくて、砂を盛り上げただけの土饅頭の前に、竹の筒を一対立てて、茶碗と皿を置いただけの墓がほとんどであり、古い所からまた掘り返して、新しい亡きがらを埋めてきた。葬式が出るまえに男の人が、棺を入れるための穴を掘りに行く。どの辺りが、どこの家の墓地というくらいの見当はあるから、なるべくその近くに穴を掘る。骨が出てきたなどという話をしているのを聞いた。だから墓地に生えたわらびやいたど

りを採る人はなかったが、だんだん土葬が許されないようになって、みんな火葬になった。そして、どういうわけか競争のように、立派な墓石を建てるようになり、ぴかぴかの石が立ち並ぶようになった。いくつも建てている家もあるので、墓地が足りなくなって、地続きにずっと奥へひろげて倍の広さにした。いちばん奥へ、墓地での最後の読経をするための石の台が移され、そこから先はもう山である。はじめはまだ奥の方には少し空間があったが、今ではすっかりふさがってしまった。いちばん奥の立派な墓は、まだ誰も入っていない、老夫婦が自分たちが入るために造った墓である。

今年はめずらしく八月八日に墓参りに行った。妹たちは七日に来ていたので、父の墓にも花が新しくてきれいだった。どこも七日には、掃除に来て、お供えをするから美しい花があふれている。わたしも花をたくさん持って行ったので、参る人がなくて花のない墓に供えていて、奥の新しい墓石に花がないのを不思議に思ったのだった。よく見たら、その石に書いてある家では、まだ誰も死んだ人はない、夫婦が村に来て一代目なのである。

墓石の前に造花や提燈などが飾ってあるのは、新しく亡くなった人のものらしい。以前なら、棺を埋めて、その上に桧皮葺きの屋形を置き、まわりに造花や提燈などが立ててあった。だんだん古くなってそういうものが取り除けられると、木の墓標が残って、細く割った竹をたくさん土にたてて輪にしたものが先の方で束ねてある。それもみんな腐ってしまうと、砂を盛っただけの土饅頭になったのだろう。父がいた時には、わたしたちは本家の墓に参っていたが、古い小さな墓石が三基ほどあって、祖父も祖母も、いとこの墓も、大きな砂の山だった。叔父が亡くなって、父もその隣に入ったが、父の墓石は母が建て、叔父の土饅頭は傍に座っている。本家の墓は

古い墓地の方にあって、「先祖代々之墓」という石が建っているが、どうしていっしょに納骨しないのだろう。祖母やいとこの墓もまだ土饅頭のままだったので、わたしは線香を砂に立てておがんだ。

石の立ち並ぶ間には、まだ土饅頭のままの墓がいくつも残っているようだった。以前にはただ白い砂の照り返しだけがまぶしく、全体に少し傾いたような砂原だったのに、ずいぶん景色が変わってしまった。ひとりで歩きまわって、終わりに入り口正面のお地蔵さんに花と線香を供えた。父の墓が奥にあるので逆戻りしてきたからだが、このお地蔵さんは、わたしの幼い頃の仲よしだったと母から聞いている。わたしの記憶にはないけれど、母が見失うと、わたしは必ずここに来てお地蔵さんと遊んでいたという。村より高い所で山や林にかこまれて、誰の目も届かないこんな所がどうして好きだったのか、お供え物をねらって、狸や狐がいるのを、もっと大きくなってから見ている。そんな所に度々やって来て一人で遊んでいて、よく何事もなかったものだと、今になって想像すると恐ろしい。年をとるに従ってわたしはどんどん臆病になっている。

このお地蔵さんは一体だけで、墓のお守りになっているのだろう。石に浮きぼりにされたものではなくて、きちんと彫像され、笏杖を持って立っておられる。前には砂原のような墓地だったから、正面の中央に立って、全体をよく見渡すことができただろうに、大きながっしりした墓石が並んで、お地蔵さんが小さくなってしまった。巨人のようなメンバーを前にして、オーケストラを指揮する形になったお地蔵さんだけれど、土地の都合で仕方なくよそ見をしているいくつかの墓石を除いては、みんなきちんとお地蔵さんの方を向いて並んでいる。身は小さくてもお地蔵さんは昔のまま、すました顔をしてみんなを迎えている。やはり浄土へ導いて下さるお地蔵さん

が、墓地の入り口におられるというのは、安心できることだろう。昔はそんなこともなかったが、近ごろは、お地蔵さんのまわりに、簡が何本も立てられていて、花がいっぱい、お供え物もいっぱい、あまりいっぱいで、いつ行っても大きなクロアリがうろうろしている。

墓の前後は山だけれど、左右は山までに窪地があって、戦後はそこにも畑を作っている人があったが、最近ではほとんどが荒れ地になっていた。セイタカアワダチソウが一面に生えて、そのうちにクズが蔓を伸ばし、わけのわからない叢になっていた。今日はそこにブルドーザーが入り、高い所から順に土を押してきて、地ならしをしている。住宅でも建てるのだろうかと思ったが、後で母にたずねたら、テニスコートが出来るのだと言う。狸がちょこんと座ってこちらを見ていた山の墓に、テニスコートができる。やかんに水を入れて、「ちょっとさんまいへいてくるわなあ」と言っていた山の墓地にも、今は水道が引かれている。まだそんなに近くまでは来ていないが、山の反対側からは町が近づいてきて、県立の美術館や、医科大学の建物は、近くの山の上に見えている。

母は、「お墓もにぎやかになって、お父さんも喜んではるやろと思てるんやわ。前には一人で参るのはこわかったけど、この頃は、テニスコートの工事をしている人がいはるさかい、お参りするのも心じょうぶやしな」と言っていた。

土葬が禁止されたので、重い棺を輿にのせて、白い着物にわらじをはいた男たちがそれをかつぎ、後から金銀の花や葬式饅頭をもったひと、紫や緑の衣で着かざった坊さんに赤い大傘をさしかけて、村じゅうでぞろぞろと送ってゆく葬式はなくなったけれど、山のなかの墓なら、まだゆっくりとした死があった。そこへゆけば死んだ

ひとが待っていてくれるような安心があった。隣でボールを追って人が走りまわるようになったら、死ぬのもあわただしい。ラケットでぽんと飛ばされるようにこの世からあの世へひとまたぎ、ボールが空を泳いでいるうちにすんでしまう。村はずでに町と呼ばれていて、人々は泥をあらいおとして、みんなさっぱりと生きている。牛やにわとりたちと一つの屋根の下でくらしてきたことなど忘れている。暗くじめじめとして、まとわりつくような意地のわるさを感じたが、そのような田舎のありかたが、人間の生命の根の部分を支えてきたのだということを思い知らされた。花や葉は枝先であかるく笑っているけれど、根まですっかり洗い流されて、どこにも陽のあたらないくらがりがなくなったら、どうして枝や葉がきらきらと輝いていられるだろうか。しかしもうテニスコートの工事ははじまっている。

よろしい よろしい ゆうて下さい

1989.8.29. 原　田　慶

八月の終りに室戸岬に上陸した台風が、雨をどっさり降らして北へ進んで行った。突然に涼しい朝がやって来て、頭が押しつぶされそうに強かった蝉の音がぴたりと止み、夏も終りだなと感じる。ほうずきをかむような音でツクツクホーシが一匹、思い出したように音をたてるのも間の抜けた感じがする。

お昼に少し前、知りあいのお婆さんが見えた。

「ああ奥さん、私ね、きのう金閣の息子の家へ行って、夕方、帰りのバスを待っていたんです。そしたら男の

人がやっぱりバスを待ってはって、二人で腰掛けてたんですけど、その人が、私に、あんたどこから来はりました、て聞かはるんです。千本の出水です、て言うたら、その人が、そんならあんた原田先生ていう人知らはらしませんか、て言わはったので、お寺の人ですやろ、て私が言いましたら、その先生に私の息子が小学校の時お世話になりましたんや、もしこんど出会わはったら、どうぞ、よろしいよろしいゆうて下さい、て言わはりましたんです。きょうの日の暮れから、私また彦根のむすめの所へ行こと思てますので、ことづかったこと、お伝えしとこと思たんです」

相手の名前を片仮名で書いたメモが、お婆さんの手の中にあった。忘れないように書いておいたのだという。なんと丁寧な人だろう、と思いながらメモをのぞいてみると、その名前は、偶然のことに、わたしが昨日の夕方、食事の支度をしながら思い出していた男の子のものだった。

九年前、夏休みが終って、二学期が始まったばかりの、まだ暑さの残る日のことである。五年生の教室で、わたしは、夏休みの課題にしておいた自由研究を、子どもたちそれぞれに発表させていた。「大文字の火床について」「ナスの料理の作り方」「旅行の記録」などと発表が進んでいった。その時に、この男の子は、ある寺院の由来について、調べてきたことを発表した。それが、どこのことだったか思い出せないけれど、大原の方だったような気がする。その中で、この寺は聖徳太子が建てたものだという説明があった。どの子どもの発表にも、後で質問があれば発表者が答えることにしていたが、わたしは「聖徳太子が建てたというのは、ちょっとおかしいのではないか」というようなことを言ってしまったのである。伝説と、史実をまちがえない方がよいと思って言

ったのだけれど、そのことが、男の子には大変なシ■ックだったらしい。その日、家に帰ってあまりしょげていたので、お母さんから電話があって、何かあったのだろうかとたずねてこられた。わたしは自分の失敗に気がついて大困りしたが、翌日、子どもにあやまろうと思って、京都のたくさんの寺を写真入りで解説している雑誌を一冊、持って行った。つい感想を言ってしまったが、わたしにも確かなことはわかっていなかったことを言ってあやまった。そして雑誌を出して、京都にはこのようにたくさんの寺があり、それぞれに古い歴史があって、さまざまな言い伝えを持っている。それを調べるためにはたくさんの資料が残されているので、これを研究するのは大切な仕事だから、もし興味があるのなら、これからも調べてくれるように。眺めていても楽しいからこの雑誌を使ってほしい、といって渡した。男の子は一日たっていたせいもあって、思ったより元気で、「ええ……、そんなん、べつになんともないのに、でもありがとう」と言って、その雑誌をかかえて行った。

わたしも、今になって、寺のいわれなどを調べてみると、おもしろい事もたくさんあり、男の子が調べてきたことも、それなりに理由のあることだったのだろうに、ほんとうに申し訳ないことをしたと反省している。だから、夏の終りにそのことを思い出して、もう大学に入ったのだろうか、どうしているだろう、手紙を出してたずねてみようかなどと考えていたのだった。

その男の子は、中学生になってから、友達をさそって一度、わたしの所まで訪ねてくれた。後、なんどか葉書をもらったが、最近ではもう音沙汰がなくなった。同じようにして子どもたちはみな成長し、遠ざかって行くものだから、それでいいと、わたしは思っている。ある日ひょっこりと、結婚しましたとか、弁護士になりました

とか、自分の描いた絵本が出版されましたなどといって、写真や、挨拶状、作品などを送ってくれることがあると、自分のことのように嬉しい。そのように順調にいっている人のことは、わりあい伝わってくるが、そうでない人のことはあまり聞こえてこない。こちらもたずねにくいけれど、たずねても「何か、バイクで走ってはるようなこと聞いたけど、よう知りません」などと言葉をにごす。だいたい察しはつくが、どの人もわたしの心の中では、いつまでもかわいらしい子どもの顔をしている。

そういう子どもたちは、当時は、わたしの夢の中にまではいり込んできて、下敷きを投げたり、川を飛び越えたりして、いっしょに遊んでいた。今ではそんな夢もめったに見ない。そして、その子どもが大人になって、今、どうしているかはまるでわからない。

言づてをしてくれたお婆さんにお礼を言って、

「ちょうど昨日、わたしもその人のことを思い出していたところでした。さっそく葉書ででも、お伝えいただいたことも書いて出しておきます」

と言った。

「そうですか、そんなら私はこれで。言づては確かにさしてもらいましたさかい」

と安心したように帰って行かれた。

偶然とはいえ、人には同じように、ものおもう季節というものがあるのに違いない。わたしはその男の子に手紙を書いて、終りに「あなたのお父さんお母さんに、よろしいよろしいゆうて下さい」と書いた。

3-0. 譬喩と名づける第三章

Aupamya-parivarto nāma trtīyah //

ここから正本、妙本ともに第二巻。「譬喩と名づける第三章」という名は、梵本では章の末にあり、章の初めのものは、校訂者が便宜的につけたものであること、すでに前にもいった。この章名、正本は「応時品第三」とし、妙本は「譬喩品第三」である。

3-1. さて、長老シャーリプトラは、そのとき満足し、躍り上がり、よろこび、うきうきし、楽しみ、上機嫌で、世尊に合掌し、世尊を敬い、世尊にむかい、世尊を見て、このように世尊にいった。――驚くべきことです、世尊よ、大きな歓喜です、わたしが世尊のそばでこのような世尊の雷のような声を聞いて。なぜなら、世尊よ、わたしがまだこの教えを世尊のそばで聞かなかったとき、他のボサツを見たり、ボサツの未来時の仏としての名を聞いたりして、はげしく燃え、焼けつくような思いがしたからです、わたしがこのような如来の知見から落ちこぼれたのだと思って。また世尊よ、わたしはしょっちゅう岩山、洞穴、森林、庭園、川辺、樹木の根もとなど、静かな処に、昼間の休息にゆきますが、そのときもほとんどいつも、次のようなことを考えているのです。真理の世界に入るという点では同じだが、われわれを世尊は小乗によって出離させられた、と。しかしまた、わたしはそのとき思うのです。これはわたしの過失で、世尊の過失

ではない、と。なぜなら、世尊がもっとも勝れた説法を無上の正しい覚りについてされるものと、われわれから期待されていたら、われわれもまた、世尊よ、この無上道において出離していたでしょう。ところが世尊よ、ボサツがそばにいないときには、わたしたちは世尊の多くの意味をこめた言葉を理解することができず、如来によって最初になされた説法を聞くのに、うかつな受け取りかたをし、保持し、修め、思い、考えました。いまこそ、世尊よ、完全に涅槃しました、いまわたしは、世尊よ、アラカンに到達したのです、いま世尊よ、世尊の第一子として、胸より生じ、口より生じ、法より生じたもの、法の化身、法の相続者、法の分身なのです。いまこそ、わたしから燃える悩みが除かれました。世尊よ、このように不思議な、このように未曾有な法を、世尊のそばで、雷のような声で、わたしは聞いたのです。

atha khalv āyuṣmāñ śāriputras tasyāṃ velāyāṃ tuṣṭa udagra ātta-manāḥ pramuditaḥ prīti-saumanasya-jāto yena bhagavāṃs tenāñjaliṃ praṇāmya bhagavato'bhimukho bhagavantaṃ eva vyavalokayamāno bhagavantaṃ etad avocat / āścaryādbhuta-prāpto 'smi bhagavann audbilya-prāpta idaṃ evaṃ-rūpaṃ bhagavato'ntikād ghoṣaṃ śrutvā / tat kasya hetoḥ / aśrutvaiva tāvad ahaṃ bhagavann idaṃ evaṃ-rūpaṃ bhagavato 'ntikād dharmaṃ tad-anyān bodhisattvān dṛṣṭvā bodhisattvānāṃ cānāgate 'dhvani buddha-nāmaṃ śrutvā 'tīva śocāmy atīva saṃtapye bhraṣṭo 'smy evaṃ-rūpāt tathāgata-jñāna-darśānāt / yada cāhaṃ-bhagavann abhīkṣṇaṃ gacchāmi parvata-giri-kandarāṇi vana-ṣaṇḍāny ārāma-nadī-vṛkṣa-mūlāny ekāntāni divā-vihārāya tadā 'py ahaṃ bhagavan yad-bhūyastvenānenaiva vihāreṇa vi-

harāmi / tulye nāma dharma-dhātu-praveśe vayaṃ bhagavatā hīnena yānena niryātitāḥ / evaṃ ca me bhagavaṃs tasmin samaye bhavaty asmākaṃ evaiṣo 'parādho naiva bhagavato 'parādhaḥ / tat kasya hetoḥ / saced bhagavān-asmābhiḥ pratīkṣitaḥ syāt sāmutkarṣikīṃ dharma-deśanāṃ kathayamāno yad idaṃ anuttarāṃ samyak-saṃbodhiṃ ārabhya teṣv eva vayaṃ bhagavan dharmeṣu niryātāḥ syāma / yat punar bhagavann asmābhir anupasthiteṣu bodhisattveṣu saṃdhā-bhāṣyaṃ bhagavato 'jānamānais tvaramāṇaiḥ prathama-bhāṣitaiva tathāgatasya dharma-deśenā śrutvodgṛhītā dhāritā bhāvitā cintitā manasi-kṛtā / so 'haṃ bhagavann ātma-paribhāṣaṇayaiva bhūyiṣṭhena rātriṃ divāny atināmayāmi / adyāsmi bhagavan nirvāṇa-prāptaḥ / adyāsmi bhagavan parinirvṛtaḥ / adya me bhagavann arhatvaṃ prāptaṃ / adyāhaṃ bhagavan bhagavataḥ putro jyeṣṭha auraso mukhato jāto dharma-jo dharma-nirmito dharma-dāyādo dharma-nirvṛttaḥ / apagata-paridāho'smy adya bhagavann imaṃ evaṃ-rūpaṃ adbhuta-dharmaṃ aśruta-pūrvaṃ bhagavato 'ntikād ghoṣaṃ śrutvā //

「方便品」での釈尊の説法を聞いてよろこぶシャーリプトラの、よろこびの描写から「譬喩品」は始まる。

「満足し」tuṣṭa は、動詞tus(静まる)に由来し、欲望が満足させられることによって静かになること。「躍り上がり」udagraは、湧き出すの意。「よろこび」āttamanas<=āpta-manas>は、意志がその欲するところに到達すること。「うきうきし」pramuditaは、動詞 mud(陽気である)に由来し気分が浮き立つ状態。「楽しみ」prītは、満足させる。「上機嫌で」saumanasaは、花に由来する、はなやぐ、の意。これだけの言葉の積み重ねを、正

本は「欣然踊躍」、妙本は「踊躍歓喜」とし、シャーリプトラの言葉に出てくる「大きな歓喜」audbilyaは、得意である、の意だが、正本は「歓喜」、妙本は「踊躍」とする。妙本の前の方の「踊躍歓喜」は「踊・躍・歓・喜」と分別した訳ともとれなくはないが、いずれにしても梵文より簡約してある。それでもいまのわれわれにはくどく感ぜられよう。ただ、ここでのシャーリプトラのよろこびに即していえば、梵文のひとつひとつの言葉は、注意ぶかく選ばれ、その積み重ねた表現も、過度といえないのではなかろうか。

「雷の声」は、今までにも出てきた。漢訳では「聖音」「微妙音」「妙音」「妙声」などとする。雷の音のようなものがなぜ「微妙」なのか、わたしにははなはだ理解しにくかったが、「譬喩品」のここを読んで、はっと気がついた。インドは熱帯であり、その夏は燃え盛り、焼けつく暑さが何十日も続く。「譬喩品」でシャーリプトラが語る、はげしく燃える悲しみ、焼けつくような思いは、インドの夏の炎熱のような苦しみだったのであろう。そこに、雨を予告する雷の音が響けば、甘美極まりないものとなろう。だから「聖」であり「微妙」であり「妙」であったのだ。「方便品」での釈尊の説法は、シャーリプトラには、まさに「雷の声」だったのだ。

シャーリプトラは、釈尊の第一の弟子であり、ビクのなかの最長老のひとりであった。ところが、わかいボサツたちが、釈尊の教えの秘要を得た者として許され、未来の世で仏となることを予告されるのを、いつも傍観するだけで、かれを同様に認める発言がなかった。そのことをいうシャーリプトラの言葉は、ほとんど嫉妬に似る。心の汚れを洗い尽くしたシャーリプトラにさえこのような苦しみがあるのかと、聞く者にさえ悲しい。しかし、つづく、おのれの至らなさをみずから責めるかれの言葉は、さらにかなしく、そうして、きよらかではないか。